

狩野山楽・山雪についての新知見

山下 善也（東京国立博物館）

狩野永徳（1543～90）の豪壮華麗な画風を継承した狩野山楽（1559～1635）。その娘婿として後を継ぎ、きわめて個性的な画風をしめした狩野山雪（1590～1651）。彼らは、桃山から江戸初期という過渡期に生き、豊臣秀吉・徳川家康・徳川秀忠ら時代の支配者と関わって城郭御殿や寺院の障壁画制作に携わり、魅力的な作品の数々をのこした。

17世紀初、江戸の地への徳川幕府設立により、時代は大きく動く。絵画界も例外ではなかった。探幽ら狩野派の本拠は、京都から江戸へと移る。これに対し豊臣氏寄りであった山楽と山雪は京都に残り、その画系は幕末まで続いた。後世、探幽の画系は「江戸狩野」と呼ばれ、山楽・山雪の画系は「京狩野」と呼ばれるようになる。

江戸狩野では、探幽が狩野派の画風を瀟洒淡白な画風へ一変させたのに対し、京狩野では、元信・永徳の伝統をもとに山楽・山雪の二代にわたって濃厚華麗な画風を形成していく。山楽はただひとり、造形の外面だけでなく内面レベルまでを永徳から受け継ぎ、山雪は、のちの伊藤若冲や曾我蕭白、長沢芦雪らに先駆ける個性の表現者となった。桃山から江戸へという激動の時代のただ中、京都と江戸、文化の拠点が一極化していく舞台の幕開けに登場する山楽と山雪。彼らは絵画史上きわめて重要な存在なのだ。

山楽・山雪研究は、土居次義氏・山根有三氏・辻惟雄氏・脇坂淳氏・林進氏・川本桂子氏・奥平俊六氏らによって進められてきた。発表者は、数年前から先学らの研究をもとに「狩野山楽・山雪」展を企画、昨年春に京都国立博物館で開催された同展を担当した。彼らの魅力あふれる絵画世界を広く伝え、同時に研究のための材料を提供したいという考えからだった。幸い国内外からほとんどの代表作の出品を実現し、作品の魅力を概ね伝えることができた。さらに同展実施により、いくつかの新知見を得ることができたので、それらについて報告したい。具体的には、以下の内容を中心に述べる。

1.山楽に関する新知見

山楽描く肖像画の基準作としての「親鸞像」、山楽が持っていた群青の山

2.山楽・山雪作品の現状と原状のズレ

山楽筆「車争図屏風」、旧・天祥院客殿襖絵の山雪筆「老梅図襖」「群仙図襖」

3.山雪の作家像の見直し

山雪については、文人的な資質を持ち、儒学者・隠者たちと交際するが俗世間との交渉は避け、絵のことばかり考えている、という「ひきこもりの絵師像」が伝えられていた。また晩年、揚がり屋（留置所）入した事実も知られていた。闇の部分が増強され、それらが山雪画特有の奇矯な形と結びつき、必要以上に暗い作家像に仕立てられていたのだ。

しかし、入獄については山雪本人が原因でないことが判明したし、没する4年前の正保4年（1647）法橋叙任ころの山雪は、公の場で気力充実した制作活動を積極的に持続していることが確認された。今後、「老梅図襖」（法橋叙任の前年の制作）をはじめとする山雪作品に対し、上記2のことも含めて、新たな眼をもって向き合う必要があるだろう。